

【一】次の文章を読んで、あとの間に答へなさい。なお、設問の都合で本文の上に【A】～【O】を付してある。

ドイツの文学や思想を研究している筆者は、一九八〇年の秋、四百万冊以上の蔵書数を誇るバイエルン州立図書館に通うため、バイエルンの州都ミュンヘン市内のマスルンカ家に下宿していた。マスルンカ氏は郵便局に勤務し、マスルンカ夫人は、朝の七時半から八時までは小学生の交通案内をして、帰宅後は、同じ建物に住んでいた人の赤ん坊をあずかり、午後五時から十時まで郵便局で手紙の仕分けをしている。

【A】この旅で私が企てた書物のコピー作業は、ニーチェにだけ焦点を絞つてはいなかつたが、ニーチェの基礎資料の発掘もまた大きな目的の一つだつた。十三年前にもこの同じ図書館で、私はニーチェについて論じられた多くの資料を写真にして持ち帰つた。しかし、今度の私の試みは、方法論的には以前とはがらりと変わつていた。私はニーチェについて西欧人が論じた資料を今度はもうほとんど求めなかつた。そして、その代わりに、ニーチェが当時読んだ思想家、勉強した本、共鳴した論文を、できるだけたくさんコピーして日本へ持つて帰りたいと企てた。

【B】彼は例えは十七世紀の自然哲学者ボスコヴィツに熱中した。同時代人ではアフリカン・シュピアードといつ哲学者をよく読んでいたし、J・C・F・ツェルナーという天文学者の仕事に深く共鳴していた。私はそういうものを片端〔①〕集めた。^{もたらす}勿論、日本のどこを探しても、こういう昔の無名の思想家の書は存在しないと考えたからである。〔②〕、ボスコヴィツやシュピアードに関する後世の研究資料さえも、ミュンヘンでは搜せば手に入ることが分かつた。この大図書館は欲しいものの枝葉を広げていけば無限に欲求を満たしてくれる一大宝庫だつた。西欧人はいつでもこれを利用して研究できる立場にいるのである。

【C】ニーチェの思想について西欧人が論じたものなどにもう私はほとんど関心がなかつた。ニーチェの思想がどのようにして誕生したか、その発生の根源を私は自分で突きとめたかった。そのためには、すでに今では読まれなくなつた、役割を果たし終えた昔の思想、しかしニーチェが明らかに当時そこから養分を得ていたに違いない思想、まさにそのままの第一資料に¹遡及して行くことが必要なのだ。これをやらなければ、日本人の西欧研究はいつまでたつても西欧の研究家と対等の立場に立つことはできないんだろう。

【D】私はそう確信して始めたのが、巨大図書館を漁つているうちに、次第に〔③〕疲労が私を捕らえだした。私は自分が何をしているのか分からなくなってきた。作業そのものに際限がないからである。この研究方法には限界といふものがないのだ。私のやつていることは図書館をそつくり東京へ運んでしまわなければ解決のつかないようなことで、ほとんど狂気じみた行為のように思えてきた。私は寒い夜、それでもコピーの機械を動かしながら、日本の西欧研究そのものが抱えているどうしようもない、底知れぬ背理の前に、自分が立ち尽くしているような眩暈^{注1}にも似た感覚を味わっていた。

【E】そんな暗い思いのある日、七時頃家に戻ると、マスルンカ家はいつものように母のいない、さびしい夕食のテーブルについていた。母親が用意しておいた鍋を小学生の長男が温めて、皆でテレビを見ながら、〔④〕簡単な内容の料理を食べているのである。食後、九時まで子供たちは父親と一緒にテレビを見ることが許される。ところが、この子たちが勉強している姿を〔⑤〕私は見たことがない。子供を上級学校へやろうという考えが親にもまったくないのだ。〔⑥〕、わが子が一族と違うことをするのを嫌う気風が彼らにはあつた。

【F】亭主は食後、穏和^{注2}しくビールを飲む。これは毎晩の日課である。外で飲み歩くことはしない。外で飲む男は多いが私の夫はしない、とマスルンカ夫人は安心したように言つていた。そういうとき、彼女は「私の夫」とくつきり、剛^{注3}らかに発音する。しかし、彼に言わせると、外で飲むのは〔⑦〕からで、家で飲めばビール一本が一マルク、食堂で飲めば二・八マルクもある、ばかりしい、というわけで、すこぶる理窟に合つていた。彼の吝嗇は相当なものである。尤も、奥さん^{注4}にこれだけ働かせていれば、彼一人がそうそう勝手な真似はできないだろう。

【G】その晩、私はワインを買い込んで來たので、一緒に飲もうと誘つた。

【H】私が居間を横切るとき抱えていた大きな紙包みの中味は何だと彼がいつて、私は外で複写してきた数百ページのコピーをみせた。彼は異なものを初めて見るという表情で、自分の手ではらはらめくつ見ていたが、一番上にあつたフランス・オーヴァーベックの『原始教会の歴史のための研究』（一八七五）の標題だけを見て、しばらく複雑な表情をしていた。それから、しきりに言葉を捜すようにして言つた。

「図書館だの、教会だのは、俺にはなんの関係もない。けれど、どうしても分からぬいな。こういうドイツの本はドイツ人が読めばよい。日本人は日本語の本を読めばそれでよい。その方が間違いが少ないはずだ。」

【I】私が怪訝な表情をしていると、彼ももどかしそうに、自分の考えたことをしきりに私に理解させようと、手真似を混じえて言葉を重ねるのだった。彼は⁴真顔であつた。この瞬間は彼も彼なりにきわめて哲学的であつたのだと、後にして思い出す。

【J】マスルンカさんの言いたかったことを、私が理解できた範囲でまとめると、次のようなになるだろう。日本には日本の宗教的な伝統があるので、日本人が¹古い教会に関する難しい本を読めば、自分の見方で読むことになり、その結果、必ず間違えた見方をするにきまつてている。それくらいなら、こういう難しい本はドイツの学者に任せておけば良く、日本人は日本語の難しい本を読めばそれで良いではないか……。

【K】おそらく、そんな意味のことであつたろう。彼は²自分にも理解できない教会に関する難解な本を、日本人の私が理解できるはずもなく、なぜそんな無駄な努力をするのか分からない、と言いたかったので、しきじき単純な日常語が分からなくて質問してくる³⁵が、なぜ自分にも読めない本に大量の金を〔⑧〕するのか、不審でならなかつたのだろう。

【L】しかし、よく考えてみると、私は彼のこの素朴な疑問に答えられる用意があるで出来ていなかつたといつてもいい。巨大図書館の中でうろうろ資料を漁っている私は、なにかが分かるつもりでやつていたが、その分かるつもりといふのがすでに錯覚もしかなかつた。西欧の思想発生の根源を自分で突き止めるといつても、マスルンカさんの言う通り、所詮、日本人の見方を増幅し、『間違い』を多くしていく結果だけなのかもしれない。

【M】図書館ごと全資料を日本に運んでしまわなければ原理的にいつて成り立たないような作業は、それ自体があり得べきでない、一個の背理に外ならないのであるから、それくらいならむしろ承知で、少ない資料で満足し、日本人に特有の『間違い』を立派に完成させて行く道を選ぶ方がずっと正しいのだといえるかもしねれない。そういう覚悟はかえつてある意味で美しいとも言えるだろう。

【N】しかしまだ、そういう仮象の美にやはり満たされず、できる限り実在に近づけようとするのもまた、人間のもう一方の眞実であろう。

【O】私にはどちらが良いのか、なぜかだんだん分からなくなっていた。

（西尾幹二『西欧の無知　日本の怠情』による。一部改変）

注

1 脱臼…めまい。

2 啓蒙…けいち 物語しみ。

3 仮象…客観的な実在性をもたないのに、実在するように感覚に現れるもの。

問一 二重傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 次の一文は、【E】から【J】の、どの段落の最後に入るか、符号で答えなさい。

それは彼にも家庭を守る最低のモラルだと判つてゐるようだつた。

問三 空欄①⑤⑧に入る語として最も適当なものをそれぞれア～オから選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|----------|-------|--------|------|--------|
| ① ア が | イ から | ウ で | エ まで | オ より |
| ⑤ ア しばらく | イ ついぞ | ウ ほどんじ | エ もう | オ ようやく |
| ⑧ ア 案 | イ 生 | ウ 乗 | エ 投 | オ 奉 |

問四 空欄②⑥に入る最も適当な語をそれぞれア～オから選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|----------|----------|--------|--------|------|
| ② ア それから | イ だから | ウ つまり | エ ところが | オ また |
| ⑥ ア しかし | イ それどころか | ウ それとも | エ たとえば | オ まだ |

問五 空欄③④⑦に入る最も適当な語をア～キから選び、符号で答えなさい。符号は一度しか使わないといふ。

- | | | | | |
|--------|------|------|-------|------|
| ア 悲しい | イ 寒い | ウ 高い | エ 冷たい | オ 深い |
| カ わびしい | キ 悪い | | | |

問六 空欄【I】～【III】に入る語として最も適当なものを文中から選んで答えなさい。

問七 バイエルンの図書館で筆者が収集している資料に当てはまらないものを一つ選び、符号で答えなさい。

- | |
|---------------------------|
| ア 十二年前に写真にして持ち帰った資料 |
| イ ニーチェが養分を得ていたに違いない思想家の著作 |
| ウ ニーチェが勉強した本、共鳴した論文 |
| エ ニーチェの思想について西欧人が論じた多くの資料 |
| オ オーヴィアーベックの著作など数百ページのコピー |

問八 波線部の理由として最も適当なものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- | |
|-----------------------------------|
| ア 外国語で書かれている著作は、真意を理解できないから。 |
| イ 思想家についての西欧の研究家の成果を参照できないから。 |
| ウ 日本の宗教的伝統が思想家についての正しい理解を妨げるから。 |
| エ 思想家が自分の思想を形成する材料としたものがわからないから。 |
| オ 思想家について最新の研究成果を手に入れるのに時間がかかるから。 |

問九 段落【B】の「昔の無名の思想家の書」に使われている傍点は、一般的には読者の注意を促したり強調したりするためを使われる。筆者が傍点を用いた具体的な理由を四十五字以内で説明しなさい。

問十 段落【N】の「仮象の美」とは、どのようなものか。段落【M】の表現を使って三十五字以内で説明しなさい。

問十一 段落【N】にある「できる限り実在に近づけうとする」ことを、段落【L】の表現を使って三十五字以内で答えてなさい。

一一 次の問いに答えてなさい。

問一 ①～⑩の熟語の読みを、アートの中から選び、符号で答えてなさい。

① 時雨	② 漸次	③ 重厚	④ 喚起	⑤ 批准
⑥ 鼓吹	⑦ 靈験	⑧ 風情	⑨ 急騰	⑩ 辣腕
ア カンガ カ こすい サ ちゅうじゅう タ ふぜい	イ きゅうしう キ ざんじ シ ときやさめ チ らつわん	ウ きゅうとう ク しぐれ ス ひじゅん ツ れいかん	エ いりやく ケ じゅうじゅう セ ひすい テ れいげん	オ こぶ コ せんじ ソ ふじょう ト れつわん

問二 ①～⑤の傍線部と同じ漢字を使うものを、それぞれア～オから選び、符号で答えなさい。

① 事件のカクシンに触れる。

- ア 大学生としてのジカクを持つ。
- イ 当選がカクジツになる。
- ウ 企業グループのチユウカクになつた会社。
- エ 一メートルのカンカクを窓で並ぶ。
- オ 賃金のカクサを無くす。

② イギを正して席に着く。

- ア 自分のイシを賣きとおして夢をかなえる。
- イ イク同音にその提案に反対をとがめる。
- ウ アンイな方法を選んで失敗してしまう。
- エ シュウイを海上にかこまれた島国。
- オ 数学のケンイとして知られる学者。

③ キカイな出来事が起る。

- ア ヨウカイ変化のしわざ。
- イ ユカイな人柄で人気がある。
- ウ 子孫にクンカイを垂れる。
- エ 自己ショウカイをする。
- オ 駅のカイサツ機に切符を運ぶ。

④ 入学の志望ドウキ。

- ア ドウシンにかえつて遊ぶ。
- イ 真夏のニユウドウ雲。
- ウ 公私コンドウは許されない。
- エ 冷静にコウドウする。
- オ 各国代表がイチドウに会する。

⑤ 運賀をセイサンする。

- ア タンセイ込めて育てた菊。
- イ すみれの花がダンセイする野。
- ウ 子どものセイチヨウを祝う。
- エ 免許のシンセイ書を提出する。
- オ パーティはセイカイに終わつた。

問二 ①～⑤のことわざ・四字熟語の意味をそれぞれア～エから選び、符号で答えなさい。

① 情けは人の為ならず

- ア 人に情けをかけるのはその人にとってためにならない。
- イ 情けは人間以外のあらゆるものに対してもかけるべきである。
- ウ 情けを人にかけておけばめぐりめぐつて自分にかえつてくる。
- エ 人に情けをかけるのはよじが罪は罪として裁くべきである。

② 船頭多くして船山に上る

- ア みんなで力を合わせて取り組めば通常ありえないような奇跡が起つる。
- イ 指図する人が多くてかえつてとへでもない方向に物事が進んでしまう。
- ウ 何事もその道のことを教えてくれる先輩が必要である。
- エ みんなが当事者意識を持たなければ事態はどんどん悪くなつていく。

③ 梅檜は奴葉より芳し

- ア 親が人望のある人物だとともその恩恵を受けることができる。
- イ 平凡な親から非凡な才能を持つ子が生まれてくることもある。
- ウ 幼児期に身に着けた習慣は生涯変えることができない。
- エ 将来大成する人は小さい時から優れたところがある。

④ 捲土重来

- ア 逆境が続いたあとようやく良い方向に向いてくること。
- イ 一度敗れたものが再び勢いを盛り返してくること。
- ウ 目的を成しとげるために長い間の試練に耐えること。
- エ 世間一般に広く知れ渡つて知らない者はないということ。

⑤ 言語道断

- ア 言葉で言い表せないほど、ひどいこと。
- イ 言葉で言い表さなくても、心で通じ合つること。
- ウ 言葉で言い表したことに対して、実行がともなわないこと。
- エ 言葉で言い表したとしても、伝える相手がいないうこと。